

猶
太
人

「ニコライ・イーリイチ、貴官一つ何か話をして下さらんか？」

といふと、大佐は莞爾して、髭の中から烟草の烟をふうと吹出したが、白頭をヒョイと撫で、我々の面を見て、ちつと考へ込んだ。一體ニコライ・イーリイチといふは深切で、分別が有つて、それでゐて我々には餘りやかましい事も云はないと云ふのであるから、若年連中では大層受けの好い人である。脊が高く、肩幅が廣くてガツシリしてゐて、顔の色はといふと淺黒い方だから、レルモントフの言草ではないが「露西亞出來の顔では優等」の方だ、而して眼付は毒の無い、と云つて些とも脱けてはゐない眼付で、笑ふと柔しい面相になつて、それでゐて太い徹る聲であるから、何となく人好きがする。

「一つ辯らうかな」と大佐は始めた。「十三年のダンチヒの戦争の時だつたがな、其時分僕は某騎兵隊附で、少尉に成つた許りだつたと思へ。戦争といふ奴は面白いもんだな、行軍も至極結構だが、攻城と來た日にやそりや退屈なもんだぞ。何處かの幕營の中で、泥の上に直に、でなきやア藁でも敷いて蹲踞んでゐて、朝から晩まで骨牌ばかり弄つてゐる。でなきや、遺悶に破裂彈や眞紅になつた砲彈の飛ぶのを觀に行くのだ。最初は佛蘭西の奴も時々出て來たから、些とは面白かつたが、其内に寂然となつて了つて、音沙汰もなくなる。最う微發に行くのも厭になるな。や、退屈で、體の遣場がないのだ。僕も其時分はまだ十九だつたし、それに頗る強壯だつたもんだ

からな、まだ乳の香は失せなんだが、一番佛蘭西の奴を驚かして、夫から一件だ……一件さ、彼奴の味も知らうと思つてたのだ。ところが、こんな事が有つたわい。僕な、餘り退屈だつたらして、骨牌を始めたのだ。すると、如何かして或時非常に敗られたが、夜が明けると夜弄つたのだな、夜が明けると、大いに恢復した。疲れては居るし、睡たくは有るし、するもんだから、外へ出て斜堤の處に躊躇んでゐた。静な、天氣の好い日だな、味方の胸壁が長い線になつて、一端が暗霧の中に消えて了つてる。僕は久らく眺めてゐたが、其内に坐つた儘で、ツイとろくとしたのだ。すると、誰だか竊と咳をする奴が有るから、眼を覺して視ると、裾の長い、鼠の上着を着てね、半靴を穿いてさ、黒の低い帽子を冠つた、五十格好の猶太人が前に立つてゐるわい。此奴は五月蠅く用を聞きに来る奴で、酒だの、食物だの、といふやうなものを持つて来るのだ。脊の低い、瘦せた、痘痕のある胡蘿蔔見たやうな色の奴で、小さな、矢張胡蘿蔔色の眼を蒼蠅くばちくやらせて、高い、端の曲つた鼻をして、始終咳ばかり仕てゐるのだ。

僕の眼を覺したのを見ると、何だかヒョコ／＼して、馬鹿鄭寧に辭儀を仕出したから、

「何だ？」

と云ふと、

「へい、なに、何か御用が有らツしやりませんかと存じまして……」

「まあ、好かつたな。」

「へい／＼、お左様さまで。實はな、伺つたら何か御用が有らツしやるだらうと、かやうに存じ

ましてな……」

「無いと云へば、蒼蠅い奴だ。」

「へい／＼、御道理さまで。えゝ、今朝程はえらい御勝利で結構で御座りましたな。」

「如何して其を知つてゐる？」

「へ、へ、存じませんで……えらい御勝利……大したもんで……いや、老爺、恐入りました……」

……」

と押付けるやうな手附をして、グタ／＼と首を振る。

僕も忌々しいから、「勝つたつて如何するもんか、錢を持つてたつて此様な處ちや仕方が無いわ。」

「で御座りませんで。錢といふ奴は重寶な物で、何時有つても差支へ無い奴で、これせえ有れば、何でもお手に入れられまする、へい、如何な物でもな。手前にさへ仰付けられますれば、何でも持つて参じまする、世の中にあるものなら、如何な物でも持つて参じまする。」

「馬鹿云へ。」

「あれだ！あれだもの！疑らつしやるだ……お情ねえ……」ト眼を閉つて、静に首を左右に振つて、「何が旦那様方の御意に入るか、存じてをります……老爺チャンと心得て居りますだ！」

と云つて變に莞爾して見せた。

「然うかな。」

キヨロ／＼四方を視廻してから、少し屈むやうにして、

「別品が御座りますよ、えらい別品が……」と復た眼を閉つて、唇を反らして、「如何で御座ります、思召が有らツしやりませんかな……御覽になれば判ります……私が今此處で何てたつて、旦那は聴いちや下さらねえ……疑らツしやるから仕様がな……それよりか連れて来て御覽に入れませう……それが宜しう御座ります！」

僕は黙つて老爺の面を視て居た。

「それが宜しう御座ります、それに限ります、では連れて参じますよ……」

と云つて高笑ひをして、軽く僕の肩を叩くかと思ふと、忽ち、火傷でも仕たやうに飛退いて、

「では、御手附を……」

「貴様欺すのだらう？人形でも持つて来て觀せるのだらう？」

「飛んでもない！」と老爺非常に憤然となつて、手を振舞はして、「何で其様な事を、お前様……若し其様な事を仕たら、好うがす、私答で四百……イヤ、五百」と蒼皇て言直して、「打たれませう……私……」

と云ひかけると、誰だか天幕の端を捲くつて、僕を喚ぶから、急いで起上つて、老爺には金貨を投げて與ると、

「では、晩げに、屹度で御座りまする。」

といふのを聞棄にして此方へ來て了つた。

諸君の前だが、實は、僕も晩が待遠だつたよ。恰ど其日はな、佛蘭西の奴が撃つて出たもんだから、僕の隊も進撃したのだ。晩方皆で火に當つてゐた、兵達は飯を焚いてゐる。其内、話が始まつたから、僕はフェルトの上衣を敷いて、臥倒んで、茶を喫みながら、人の話を聴いてゐた。骨牌を弄らないかつて勧められたけれども、斷つて弄らなかつた。どうも氣になつてならないんだな。其内に他の奴等は思ひ／＼に天幕に入る。火は消えかゝる、兵達も天幕に入る奴もあれば、其處へ寝て了ふ奴も有る。森として了つた。でも矢張僕は横臥んでゐた。從卒は躊躇んで火に當りながら、船を漕いでゐる。巡察が通るな。哨兵が代はる。それでも凝然と臥て待つてゐた。星が出て、最う全然夜になつた。消えかゝつてゐる篝の火を久らく眺めてゐると、それも到頭消え

了ふ。「彼奴、欺しをつたな、」と呟きながら起きようとする、

「旦那様……」

と、頭の上で震ひ／＼呼ぶ聲がする。

振向いて視ると、ギルシェリだ。非常に蒼然な面をして、物を言ふにも吃つて囁めく。

「お前様の天幕へお伴致しませう。」

と云ふから、起上つて後に隨いて行くと、老爺奴小さくなつて、夜露に濡れた短い草の上を竊と歩いて行く。向うの方を視ると、誰だか被衣を被つて凝然と立つてゐる者がある。老爺が手招きをすると、側へ来て、何かヒソ／＼話し合つてゐた。其内に老爺が此方に向いて頻りに頷く。皆連立つて天幕の中へ入つた。馬鹿な話だがなア、僕は其時息が塞つてならなかつたよ。

「旦那様、」老爺も物が云はれんと見えて、漸と小聲に云ふのだ。「旦那様、連れて参りました。何やら怖ながつて居りますで、旦那は善い方だ、立派な方だ……トかやうにな、言聞かせて居りましたので。へい……これ、何や、そんなに怖ながらんが可え……何も怖ないことはねえよ……」

けれども、お被衣様は動かない。僕も非常に狼狽して了つて、何と云つて可いものか、解らん。ギルシェリも同じく周章して、手を啓けて變な身振をしてゐるばかりさ……

「貴様は外へ出てをれ。」

と僕が云つたもんだから、老爺泣々出て行く。

それからお被衣さまの側へ寄つて、徐と其黒つぽい被衣を取つて見たと思ひ給へ。ダンチヒに火事があつてな、空に淡紅く映つてゐるのが、時々明くなつたり、暗くなつたりする、その光で見ると、眞蒼な面をしてゐる猶太人の少女だつたがな、頗る美だわい。僕は前に立つて黙つて面を視てゐた。少女は始終伏目になつてゐた。ござ／＼といったから、振向いて視ると、老爺天幕の端から竊と覗いてゐる。忌々しいと思つて手眞似で叱つたら、其儘スツと首を引込めて了つた。

それから、

「お前の名は何といふ？」

と、少女に聞いたたら、

「サーラと申します、」と云つたがな、其時何でも切の長い大きな眼だつたが、その白眼とな、細い眞白な綺麗に並んだ齒が暗中にちら／＼とした。

革の枕を二個土間へ投出して、坐れと云つたもんだから、外套を脱つて坐つた——のを視ると、彫刻のある圓い銀の紐釦を附けた、袖の寬い、前の開いた、短い、青色の胡索上衣を着て、黒い濃い頭髮を編んで、小さな頭へ二重捲いてゐた。僕が側に坐つて手を——細い淺黒いな——手を

把つたけれど、左程厭がりもせん、けれども何となく臆して居て、成るべく僕の面を視ないやうにして、而して息氣を激ましてゐる。僕は少女の亞細亞臭い横面を視てゐたが、堪らなくなつて冷たい震へてゐる指頭を竊と締めて、

「露西亞語が使へるかい？」

「はア……少しばかり。」

「露西亞人は好きかい？」

「好きですよ。」

「露西亞人が好きなら、己も好いてゐるだらうな？」

「はア。」

抱付かうとしたら、ちよいと外して、

「いけませんよ、旦那。」

「ぢや、責めて己の面でも視て呉れ。」

黒眼の鋭い眼で瞥りと僕の面を視たが、微笑して直ぐ餘所を向いて、面を眞紅にした。

それから僕が震付くやうに其手に接吻すると、額越に僕の面を視てクス／＼笑出した。

「何が可笑しい？」

と問いたら、袖を面へ面てゝ、益々笑ふ。

ギルシェリが入口の處へ面を出して、手眞似で制したので、少女は黙つて了つた。

僕が面を膨らして、

「彼方へ往つとれツ！ 蒼蠅い奴だ。」

と云つても、老爺遅々してゐるから、革袋の中から金貨を一掴出して、それを握らせて、突出

して了ふと、少女が、

「旦那、此方へも頂戴な。」

といふから、幾枚か膝の上へ投げて與つた。然うすると、敏捷くそれを拾つて了つた。

「さア、これから接吻するよ。」

「いけません／＼。」ト恠々して拜まぬばかりさ。

「何を其様に怖がるんだらう？」

「でも、怖いんですもの。」

「そんなこと云はずに……」

「本當に、そればかりは何卒堪忍して……」

と云つて、恐る／＼僕の面を視て、少し首を傾げて、手を組合せてゐるから、僕も打棄つて置

いた。すると少し経つてから、

「ぢや……これだけ……」

と僕の口の處へ手を持つて來たが、最う此方も餘り氣が無かつたから、好加減に接吻すると、また笑ひ出した。

どうも僕も變な氣持で、厭になつちやつたねえ。如何したら可いか、譯が解らないのだ。ちよッ、馬鹿氣てゐる、と思つたね。

それから復た少女に、

「おい、サーラ、己はお前に惚れてゐるんだよ。」

「知つてよ。」

「知つてる？ そんなら惚れてゝも可いか？ 己にも惚れて呉れるか？」
頷く。

「それぢや不可、ちやんと判然云つて呉れ。」

「ぢや、まあ、貴君の男振を視てから……ほ、ほ、ほ……」

ソーレと面を出すと、肩へ手を掛けて面を熟々視て、眉を顰めたり、微笑したりしてゐる……最う堪らないわ、卒然頬に接吻してやつた……すると、ヒヨイと跳起きて、ツイと入口の處へ往

つて了つた。

「猿見たやうな奴だなア！」

と云つても、黙つて立つてゐる。

「此處へ來いよ……」

「最う厭。左様なら。また他日。」

ギルシェリが復た練髪の頭を出して、小聲に一言二言少女に囁くと、少女は屈んでスツと外面へ出たから、僕も跡から天幕を出て見たが、最う二人とも影も見えなかつた。

其晩一晩どうも眠られなかつたよ。

翌朝皆が大尉の天幕に集つた。僕は骨牌を弄つてゐたがな、實は仕様事なしさ。すると僕の從卒が入つて來て、

「面會人が有ります。」

「誰だ？」

「猶太人。」

「ギルシェリだな、」と思つたから、一勝負済むのを待つて、席を起つて、外へ出て見ると、果して老爺さ。

僕の面を見ると、厭に莞爾しやアがつて、

「如何で有らつしやりましたな、お氣に入りましたかな？」

「や、どうも……」と云ひつつ大佐が此方を振向いて、「御婦人は在なさんやうだな……イヤ、まア、如何でも宜え哩、」と云ひ棄て、「おい、老爺、」(と出直して)、「貴様は己を欺いだな？」

「何故で御座います？」

「何故もないもんだ？ 好加減にとぼけて置け！」

「それは、旦那様、いけません、お前様が御無理で有らつしやる、」と怨めしさうに云つたけれど、矢張莞爾してゐるんだ。「お前様が御無理で有らつしやる。若い女で、内氣だのに……お前様は威かして了つたんですがすもの。」

「内氣が好い！ 内氣なら錢なんぞ取りもすまいが……」

「だつて、與らうと云ふものを貰はんア不利でがさ。」

「ぢや、最う一遍連れて来い、然うしたら勘辨してやる……だがな、貴様此度は彼様に覗いちや不可ぞ、邪魔をすると承知しないぞ。宜いか？」
と云ふと、ギルシエリの眼は爛々としたが、

「が、まア如何で有らつしやりましたな？ お氣に入りましたかな？」

「さう、彼女なら可いな。」

「別品で御座りませう？ 彼様な別品は澤山は御座りません。時に、只今骨折賃が頂けませうか？」

「うむ與らう。だが、約束は錢より貴しだ。此度彼女を連れて来たら、置いて行くんだぞ。宜しいか？ 然うすりや、己が家へ送つて行つてやる。」

「そりやア不可、それは……」と蒼皇てゝ反對するのだ。「そりやア如何しても不可や……私が天幕の外に居るのなら、宜しう御座ります、少し位なら離れても居りませう……ねえ、お前様の事でがすから、離れて居りませう……なアに、グツと離れて居ります。」

「ぢや、まア、それでも可いから、偽言を吐くな……而して屹度連れて来るんだぞ、宜しいか？」

「だが、別品で御座りませう？ ねえ、旦那？ 別品でねえ？」

と屈んで面を覗込むやうにするから、

「さうさ、姿色は好いな。」

「ぢや、最う一枚頂かせて遣つて下さいまし……」

金貨を一枚投り附けて、ギルシエリとは別れて了つた。

其日も晩れて夜になる。僕は永い間天幕に獨りで居たが、外面は薄明るかつた。町で二時を撃つ。老希奴敷しやアがつたな、と思つたから、徐々一人で口小言を言出すと……ふとサーラが入つて來た、而も一人でな。跳起きて、抱付いて……唇を面へ加てゝ見ると……氷のやうに冷たい。尤も面相は判然しなかつたがな。先づ坐らせて、其前に膝を突いて、身體に觸つて見た……それでも黙つてゐて、身動きもしなかつたが、其内に不圖身を顫はして、ワツと泣出した。幾ら慰めたり賺したりしても、止らない。吃逆りあげて泣いてゐる。背を撫でたり涙を拭いたりしてやつたが、矢張厭がりもしない、其代り何と云つて問いても返答をしないで、唯泣いてゐる——ひた泣に泣いてゐるのだ。僕も變な氣持になつて來たので、起上つて外面へ出ると、

ギルシエリが、地からでも湧いたやうに、ニョツコリ鼻の頭へ出て來た。

「ギルシエリ。ソラ約束の錢だ。最う連れて行つて呉れ。」

と云ふが否や、ギルシエリは少女の側へ飛んで行く。少女も泣罷んで、ギルシエリに縋り附く。

「サーラ、最うおさらばだ。最う己も諦めた。縁が有つたら、復た遭はう。」

と云ふと、ギルシエリは黙つて辭儀をしたが、サーラは屈んで、僕の手を把つて、接吻するぢやないか。厭になつちやつたね……

五六日経つたが、どうも少女の事は忘れられない。ギルシエリも來ないが、誰も見掛けないといふ。僕はどうも夜も碌に寝られないといふ始末だ。潤みを持つた、黒眼勝の、睫毛の長い眼が始終眼前に隠現いて、餅肌の、滑つこい頬の唇に觸り工合が如何にしても忘れられないのだ。すると命令が有つて、僕は分隊を率ゐて遠方の村へ徵發に行つたと思ひ給へ。兵に百姓屋を軒別に搜索させて、僕は往來に馬を立てゝ居ると、ふと誰だか僕の足を捉まへた。

「や、サーラぢやないか！」

と云つたが、少女は眞蒼な面をして、わな／＼しながら、

「だ、旦那……ど、何卒助けて……兵隊さんが亂暴して……何卒、旦那……」

と言掛けて、ふつと氣が附いたと見えて、眞紅になつた。

「お前は此村の者か？」

「ハイ。」

「何處だ、家は？」

小さな古家に指しをするから、馬に一鞭當てゝ駆付けて見ると、家の前の空地で、面の醜い女の猶太人が、僕の方の軍曹でシリヤーファといふ脊の高い男にな、牝鶏と雛鶏とを三羽奪られたのを取返さうとして、秩序の無い姿をして争つてゐる所なんだ。シリヤーファ奴分捕物を頭より

高く差上げて笑つてゐる。牝鶏がケコ、いふやら、雛鶏がビイ／＼啼くやらといふ騒ぎだ。向うの方では兵士が二人ばかり、枯草や藁や粉の袋を自分の騎つて来た馬に駄んでゐる。家の中では小露西亞の語で何やら頻りに喚いて罵つてゐる聲がする。けれども、僕が大聲を出して、此處は打棄つて置け、何も手を附けるな、と制したもんだから、皆手を引いて了つた。軍曹も自分の紅栗毛に乗つて、僕の後から往來へ出て来た。此紅栗毛がさ、牝馬で一體はプロゼルピナといふ名なんだけれども、何故か軍曹はプロジェクトラと云つてゐるんだ。

「どうだ、これで好からう？」

と少女に云ふと、少女もな、僕もな、面を見て莞爾りしやアがつた……それから、

「あれから如何してゐた？」

と云ふと、俯目になつて、

「明日行きますから……」

「晩にか？」

「いゝえ、朝の内に。」

「嘘を吐いちや不可ぞ。」

「あら、嘘なんぞ吐きやしませんよ。」

僕は穴の開くほど少女の面を視てやつたがな、白晝視ると、一段と美だわい。殊に面の色が本
ンノリ黄ろくて、黒い頭髮が薄青く光る所は、好かつたよ……馬から屈んで、小さな手をちつと
握締めて、

「それぢやお分れた……屹度来るんだぞ。」

「行きますよ。」

と云つて歸つて行く。軍曹に後から兵を連れて追付けと命じて——僕も駈を逐つて戻つて了つ
た。

翌朝夙く起きて、服を着けて天幕を出て見ると、好い天気だな、日が出たばかりで、野草に置
渡した露が燦爛と光つて見えるのだ。それから高い胸壁の上へ登つて、砲門の端に腰を掛けてゐ
た。下には鑄鐵の大きな大砲が野へ向けて眞黒な口を突出してゐる。放心して四方を眺めてゐた
が……ふと氣が附いて見ると、胸壁から百歩ばかりの處に鼠の上衣を着て圓くなつてゐる者があ
る。何者かと思へば、ギルシエリさ。老爺久らくの間凝然と立つてゐたつが、其内にふと駈け
退いて、キヨロ／＼四邊を視廻した……而して何か聲を出して云つて、蹲んで、竊と首を伸ばし
て、また四邊を視廻したり物音を聴澄したりしてゐる。爲る事は何でも判然見えたがな。頗て懐
へ手を入れて、紙片と鉛筆を取り出して、何やら字だか繪だか描き出した。數次手を止めて、ブル

ブルツと慄へて、四方を屹と視廻すところは、何となく陣地の圖でも取つてゐるらしい。幾回かその紙片を隠して、目を細くして、様子を考へてはまた描き出す。其内に草の上に臂を突いて、靴を脱いで、其中へ例の紙切を押込んで、衝と起上らうとすると、十歩ばかり離れて斜堤が有つた、その影からシリヤーフカの髭面がヌツと出て、長い不格好の胴が徐々地を離れて起上るのが見える。シルシエリは背向に立つてゐたのだ。ところをシリヤーフカがツカ／＼と側へ来て、突然大きな手を肩へ掛けたので、駭然と縮上つて、齒の根も合はぬ程に慄へて、哀れな、如何にも果敢ない聲を立てた。シリヤーフカは怖ろしい權幕で二言三言問答してゐたつけが、突然シルシエリの襟元をむづと掴む。話聲は聞えないが、シルシエリが一生懸命に跳いて、拜まぬばかりの面色をしてゐるから、大概それと察しが附いて來た。老爺二三度軍曹の足下に蹲いたが、其内に隠衣へ手を入れて、縞の破れハンケチの包みを出して、それを解いて、金貨を出した。シリヤーフカは威張つて取る物は取つたが、矢張襟元を掴んで引立てるので、此度は振奮つて逃出す、追蒐ける。老爺なか／＼達者に駈けた。青い靴足袋を穿いた足がチヨコ／＼動くのが見えたが、それでもシリヤーフカが二三度、漁師の言草ぢやないが「追」を掛けて、老爺がベタリと平伏つた處を引捉まへて、引摺起して、抱上げるやうにして、此方へ連れて來る——隊の方へな。それから僕も立上つて、その方へ向つて行くと、シリヤーフカが大聲を出して、

「間諜を捉まへましたア、間諜を！（シリヤーフカは小露西亞人で頗る強壯な奴だつたが、汗をたら／＼流してゐるのだ。）えい。じたばたするなツ！ うむと、糞ツ……此畜生奴！ そんなに跳くと、捻潰すぞ！」

シルシエリは辛とシリヤーフカの胸に肘を突張つて、足でばた／＼やるけれども、毫とも力が入つてゐない……眼をきよろ／＼さして、いや、見るも哀れな體さ。

「如何したんだ？」

とシリヤーフカに尋ねると、

「失敬ですが、此奴の靴を脱つて下さらんか——右の方の。私や……手が放されん……」

「まだ抱いてゐるんだな。」

それから僕が靴を脱つて、紙片を幾つにも折つたのを引出して、開けて見ると、果して陣地の見取圖だ。明細に描取つてある、而して端の方に猶太語で細く種々な事が書いてあるのだ。

シリヤーフカはシルシエリを卸したが、老爺眼を開いて、僕の姿を視ると、卒然前に膝を突いて了つた。

僕は黙つて紙片を示して、

「何だ、是は？」

「そ、それは……それは……詰らないもんで……ソノ……何で御座りまする。」
と詰つて了つた。

「貴様は間諜だな？」

間諜が解らなかつたと見えて、取り留めぬことをクドク言つて、慄へながら足に縄付くから、
「イヤサ、貴様は敵の探偵だな？」

「ア、お情ない！」と、さも情ない聲で云つて、首を掉つて、「如何仕りまして！ 決して其様な譯ちやア、そりやア決して御座りません。そんな、旦那様、大膽な事が……あゝ、最う仕方がない。宜しう御座ります、只今直ぐでも。此處に金子も御座ります。へい、皆差上げて了ひます。」

と云つて、眼を閉つた。

帽子は頸窩の處へ滑つて、胡蘿蔔見たやうな色の頭髮が冷汗に濡れてベツトリしてゐる。それに唇は蒼褪めて、ビク／＼しながら歪んで、眉が眼に接合つてゐて、頬さへ落けてゐるのだ……兵が周圍に環立つて來た。僕は最初は嚴しくギルシエリを叱付けて、シリヤーフカには口留をして済してやらうかと思つてゐたが、かうなると、最う表沙汰になつて來たから、例の報告といふ奴をやらん譯にいかなくなつた。そこで、

「聯隊長の處へ連れて行け。」

と、軍曹に命じる。

と、聴くと、老爺一生懸命の聲を出して、「あゝ、旦那様！ 何も悪い事を致したのちや御座りません……お助けなすつて、何卒お助けなすつて……」

シリヤーフカが、

「聯隊長の處へ行きや解る事ツた。さア、歩べ！」

「旦那様や！ お助けなすつて!! お助けなすつてエ!!!」

と、後から呼懸ける其聲が腸を穿るやうなので、僕は思はず急ぎ出した。

聯隊長といふのは獨逸人で、正直な、毒のない人だつたが、紀律の事となると頗る嚴格なんだ。小さな假舎に居たから、其處へ入つて簡単に報告をしたが、軍律の嚴なことは兼て承知だから、間諜のカンとも云はずに、極く詰らん他愛のない事のやうに紛らして云つて見た。けれども、ギルシエリはよく／＼運がないと見えて、聯隊長は人情よりも職分の方を重く見た。

で僕に、「君若いから、何も知らない。戦争といふもの知らない。君が報告しました（これが口癖なんだ）報告しました事件は、大切な、甚だ大切な事件です。その生捕にしました人何處に居ります？ 猶太人？ 何處に居ります？」

と、云ふから、僕は外面へ出て、ギルシェリを連れて来いと命じた。

頓て連れて假舎へ入つて来たが、や、氣の毒な、最う足がふら／＼してゐるのだ。聯隊長は僕に向つて、

「此人は……が……持つてゐました圖は何處に在りますか？」

例の紙片を渡すと、聯隊長開けて見たが、「一足後へ却つて、眼を細くして、かう濛い面をして、

「これは、た……い……へん……」と妙に節を附けて、「誰が逮捕しました？」

「私です！」と、シリヤーフカが勢込んで答へた。

「善く逮捕しました。ソコデお前が何か言譯することあるか？」

ギルシェリはさも哀れつぽく、

「隊長様に申し上げます。手前……決して悪い事致した覚えは御座りません、へい。此處に居らせられまする士官様にお尋ねになれば解りまするが、手前は、殿様、御用達で御座りまする。へい、正直な御用達奴で御座りまする。」

聯隊長は勿體らしく首を掉つて、低い聲で、「厳しくせんければ、云ふまい。コラ、一體如何したることか？」

「決して、殿様、決して何も悪い事致した覚えは御座りません。」

「いや、然うでないだらう？ お前、露西亞語で何と云ふか知らんが、現行犯で、眞實の現行犯

で捕はれたのではないか？」

「如何仕りまして、殿様、決して何も手前致しは致しませんで御座ります。」

「お前圖を取つたではないか？ お前、敵の間諜ではないか？」

「手前は何も致しません！」と急にギルシェリは大きな聲になつて、「私やアそんな事知りません。」

聯隊長はシリヤーフカの面を視た。

「聯隊長！ 此奴は嘘を吐くのです。少尉殿が自身此奴の靴を取つて書付を出されたのです。」

聯隊長が今度は僕の面を視るから、僕も領いて見せない譯にかなかつたさ。

「お前敵の間諜である……喃、お前……」

「私やア知りません……へい……私やア知らない……」

と、途方に暮れた様子だ。

「お前此度ばかりで有るまい、以前にも此様な事あらう？ 白狀せい。」

「如何致しまして、飛んだ事を……」

「お前、己を欺かすこと出来ない。お前、間諜である喃？」

ギルシェリは眼を閉つて、例の首を掉つた。

聯隊長は暫らく黙つてゐたづけが、頓て判然と、

「軍律に照し、絞罪申付くる！ フョードル・シリケリマン君を召んで来い。」

聯隊副官のシリケリマンを召びに行つたので、ギルシェリは眞蒼になつて、口を開いて、眼を

圓くしてゐる。其内に副官が来て、聯隊長の命令を聴いてゐると、聯隊書記が寄せこけた痘痕面

をヌツと出した。珍らしさうに室内を覗込んだ將校も二三人あつた。

「聯隊長、可哀さうぢや有りませんか。免してやつては如何です……」

と、僕の獨逸語で言へるだけに云つて見ると、聯隊長は露語で、

「先刻も云ふ通り、君未だ何も知らないです。だから口を出す、妨害になります。黙つてお出

でなさい。」

ギルシェリは悲鳴を揚げて、聯隊長の足元に身を投じて、

「殿様、何卒御勘辨なすつて、最う、殿様、これからは決して致しませんが……女房も御座りま

す、娘も御座ります……何卒、お慈悲に助けてやつて下さいまし……」

「如何も仕様がな……」

「手前が悪う御座りました、殿様、全く手前が悪う御座りました。へい、今度が初度で御座り

ます、初度で、へい、決して嘘は申上げません。」

「以前に此様な事せんといふのか？」

「初度で御座ります……女房や……娘……殿様、お慈悲で御座ります……」

「だが、お前問謀だから喃。」

「殿様、女房が御座ります……娘が御座ります……」

聯隊長も哀れを催したが、如何も仕方がない。で、進まぬながら復た、

「軍律に照し、絞罪申付くる。」

と、云つたが、其様子が如何にも職分だから是非に及ばん、職分の爲に忍んで情を捨てるのだ

といひさうだつたよ。

「絞罪申付くる！ フョードル・カルレイチ、此事件の報告を書きますことを頼みます。」

すると急にギルシェリの様子が妙な鹽梅になつて来た。今までは、猶太人の固有だから、例の

通りキョト／＼した面相をしてゐたが、此時急に如何にも情なさうな面相になつてさ、穢でも

捉まへて来たやうに狼狽し出して、口を開いて、皺腹れた、物に籠つたやうな聲を立て、震へ

る腕を掉り廻しながら、如何だ、跳ねまでしたぜ、靴を穿かせてやらなかつたもんだから、片

片しか穿いてゐないのだ……それに、上衣の胸は開くな……帽子は摺落ちる……

皆慄然としたよ。聯隊長も黙つてゐるのさ。から僕がまた、

「聯隊長！宥してやつては如何です？」

と、いふと、聯隊長幾分かわな／＼する氣味もあつたが、聲を鋭くして、
「なりません。軍律に背く、懲戒にならん。」

「ですが……」

「少尉殿！君の持場へ歸んなさい。」

と、入口へ指しをした。

僕は辭儀をして外面へ出て了つたが、僕には持場といふものが無かつたもんだから、矢張假舎の近所に彷徨してゐた。

二分ばかり経つと、シリヤーフカと兵が三人隨いてギルシエリが出て來た。可哀さうに、足が縮んで、善くは歩けない。シリヤーフカは僕のの前を通つて隊の方へ行つたが、頓て繩を持つて歸つて來た。一體此奴は毒はないが、酷い佛頂面なんだ。けれども此時は殘忍な、と云つて何處か可哀さうと思つてゐるやうな處もある、妙な面相になつてゐたのさ。ギルシエリは繩を視ると、兩手を舉げて、ペタリとなつて、泣出した。兵卒共は黙つて側に立つて、難かしい面をして凝然と地面を視詰めてゐる。僕はギルシエリの側へ行つて、物を言懸けて見たが、子供のやうに泣い

てばかりゐて、面を揚げ得ないのだ。最う仕方がないから、僕も天幕へ戻つて來て、敷物の上へドツサリ倒れて、——かう眼を閉つてゐると……

ふと誰だか息急きつて駆込んで來たから、面を上げて視ると、サーラさ。顔色を失くしてゐるんだ。而して僕に飛附いて、手を引張つて、「後生だから……來て……來て……來て……」

と、肩で息をする。

「何處へ？ 何しにさ？ まア、それよりか此處に居れ。」

「老爺の處へ、老爺の……早く……助け……助けて下さいッ！」

「老爺とは、誰の？」

「私のさ。今絞罪にされる所だから……」

「えッ！ ぢや、ギルシエリは……」

「私の老爺ですよ？ 跡で悉皆話して了ふから、來て下さい……後生だから來て下さい……」

と、一生懸命になつてゐる。

一所に天幕の外へ駆出して視ると、原の後方に一本樺の樹がある、其方へ兵が塊つて行くのが見える。サーラは何にも云はずに、唯其人影に指しをして見せた。

ふと氣が付いたから、「まア、待て。彼處へ往つたつて仕様がな。己の命令ぢや、兵が聽か

んよ。」

と、云つても、サーラは唯妄に引張る……いや、僕も眼が眩りさうになつて来たね……でも仕様がなから、「まア、落着いて聴け。そりやア彼處へ往つても、本當に仕様がなから、それよりか復た聯隊長の處へ往つて見よう。お前も来い。ひよつとしたら命乞が出来るかもしらん。」

と、云ふと、サーラは急に立止つて、まぢく／＼と僕の面を視るから、

「本當にいかんよ。己にはお前の老爺を助けることが出来ない、聯隊長でなければ出来ない。だから、一所に往かう、聯隊長の處へ。」

「でも、其間に殺されつ了ふから……」

と、泣出しさうに云ふ。

振向いて彼方此方視廻すと、聯隊書記がツイ彼方に立つてゐたから、

「イワーノフ、」と、聲を掛けて、「急いで彼處へ行つてな、少し待てと然う云つて呉れ。己は聯隊長の處へ往つて、最う一度命乞をして見るから。」

「承知しました。」

とイワーノフは駈けて行つた。

けれども、聯隊長の處へ往つても、入れない。頼んでも見たし、理屈を云つても見たし、最後には罵詈雑言までして見たが、駄目だ。サーラも身を揉み急つて番兵に縋附いたが、駄目だ、何如しでも入れない。

すると、サーラは險しく四方を視廻して、兩手で頭髮を掻きつて、疲風の如く駈出して老爺の居る方へ行くから、僕も續いて駈出した。皆驚いて視てゐるんだ……

兵卒共の居る處へ来て見ると、大勢ギルシェリの周囲に環立つて、可哀さうも何も有りやしない、ワイノ、云つて笑つてゐるんだ。如何だ、諸君！僕も怫然としたから、皆を叱付けてやつた。ギルシェリは我々の姿を視ると、突然娘の首に絡付いたもんだから、娘も戦々しながら縋付いた。可哀さうに、赦されたと思つたんだな……僕に禮を云ひかけたから……堪らなくなつて顔を背けて了つた……

「旦那様、」と叫んで、手を握合せて、「お教が出たんぢや御座りませんか？」

僕は黙つてゐた。

「え、然うぢや御座りませんか？」

「然うぢやない。」

「旦那様や、御覽下さい……これが、これが——私の娘で御座りまする。」

「知つてゐるわ、」と云つて復た顔を背けた。

「旦那様、私は彼の時天幕の側に居りました。如何な事があつても此娘は……（と、云ひかけて、一寸眼を閉つて）……私は錢が欲しかつたので御座ります、有體に申上げれば、錢が欲しかつたんで……だが、如何な事が有つても、こればかりは……、と思つて居りました。」

僕は黙つてゐた。老爺も厭だつたが、同類になつてゐた娘も厭になつて來た。

ギルシエリは一段聲を低めて、

「だが、旦那様や、今若しお前様のお骨折で命が助かりますことなら、コノ私が申付けます……」

な……如何な事でも……最う私何でも厭とは申しません……」

と、云つて、戰々して四方を視廻す。サーラは何も云はずに、情に迫つて直と父に抱付いた。

聯隊副官が來て、

「……少尉殿！ 司令官の命令に依つて、貴官を逮捕します。貴様達は……（と兵卒共に目配せして）直ぐやれ！」

シリヤーファカがギルシエリの側へ寄つて來た。

僕は副官に向つて（副官には何でも兵が五人ばかり隨いて來たんだ、）副官に向つて、

「フヨードル・カルルイチ、責めて此女を遠ざけて置いてから、行ふことにして下さらんか？」

「勿論。然うします。」

サーラは辛と息をしてゐる。ギルシエリは猶太語で何か娘に耳打をした。

親子抱合つてゐるのを漸く引離して、勞りながら二十歩ばかり連れて退くと、サーラは急に執られた手を振解いて、老爺の方へ駈けて行かうとする……シリヤーファカが留めに掛かるのを突飛ばして置いて、貌を少し紅くして、眼を光らして、手をかう前の方へ出して、獨逸語だつたが、

「畜生！ 畜生！！ 畜生奴！！ 今に見るが好い、お前達は、基督なんぞを信仰する奴は皆、私達

の思ひで、貧乏して、子種が盡きて、非業な最後をするから、見るが好い！ えい、此儘地面が

裂けて、皆死んで了へ、罰當り奴、情知らずの、極道の、狗め……」

うむと踏反つて……バツタリ倒れる……兵卒等が引起して、連れて行く。

此方ではギルシエリの兩手を把つて引立てる。先刻何故皆が彼様に笑つてゐたのか、此時始めて解つた。哀れで眼も當てられぬ仕合せだが、成程ギルシエリの様子は可笑しかつた。そりやア

今が此世を名残で、娘や妻にも生別をしなければならぬのだから、身も世もあられまいだらうけれど、妙な身振をしたり、變な聲を出したりして、跳ねまでするもんだから、皆も思はず微笑した。けれども、厭な氣持のすることは一通りでないのだ。

ギルシエリは怖ろしいので消入るばかりになつて、

「あ、あ、あ、ま、ま、待つて下さいまし！ いふことが有ります、澤山御座ります。大軍曹様や、お前様は私を御存じちや御座りませんか？ 私は御用達だ、正直な御用達だ。そんなに捉まへんでも好い。ま、ま、ま、一寸、ちよ、ちよ、一寸で好いから、お待ちなすつて下さい。何卒お放しなすつて下さいまし、私は哀れな猶太人で御座ります。サーラ！……サーラは何處に居る？ 何處にも居ない、宿割少尉様の處に居るのだ（何で僕を宿割少尉なぞと云つたのか、解らん）。宿割少尉様や！ 私は天幕の側に居ります。（と云つてゐると、兵卒共が首の根子を押へさうにしたので、ワツと云つて、振電つて）殿様、旦那様、助けて下さい、女房子の有るもんだ！ 金貨十枚上げます、十五枚上げます、旦那様！……（それでも樺の樹の方へ引立つて行くので）勘弁して！ 宥して！ 宿割様！ 旦那様！ 大將様！ 隊長様！……」

ギルシエリの首に係蹄を掛けたから、僕は眼を閉つて、妄に駆出した。

それから二週間謹慎を喰つてゐたが、風聞で聞くと、ギルシエリの未亡人が其後亡者の衣服を受取りに來たさうだつたが、然うしたら聯隊長が百留恵んで遣つたといふことだ。サーラには其後些とも逢はなかつた。其内に僕も負傷してな、病院へ入れられたが、治つた時には、最うダシチヒも抜けて居つたわ。——それからの、僕は聯隊の跡を追つて、ラインの岸まで往つて、漸く追付いたツけ。

あそこがき

神西清

この集は二葉亭四迷の名譯を通じてツルゲーネフの五つの珠玉篇を、あらためて味はひ直さうといふ企てである。

二葉亭の名譯ぶりを味ははうといふのか、それとも短篇作家としてのツルゲーネフの醍醐味に陶醉しようといふのか、その邊の區別は實をいふと大してはつきりはしてゐない。その點、讀者はあまり固苦しく考へる必要はないだらう。ごく稀にあることだが、この世の中には名作の名譯といふものが、幸福な一身同體のすがたで出現することがないでもない。わが國にも明治以來、そんな現象が時々あつた。鷗外の『即興詩人』や『フアウスト』兩部のこととは改めて言ふまでもない。上田敏の『海潮音』や永井荷風の『珊瑚集』など、譯詩集の場合にもそれはある。二葉亭のツルゲーネフ翻譯もやはり、さうした稀有の現象のあひだに立ちまじつて、優に他と拮抗するばかりか、ともすれば却つて凌駕すらしかねまい名品なのである。

この集に收めた二葉亭のツルゲーネフ翻譯は五篇であるが、もちろんこれがこの分野における彼の譯業の全部ではない。このほかに目ぼしいものとしては、まづ第一に『うき草』が擧げられなければならない。これは周知のやうにツルゲーネフの初期を代表する傑作『ルーヂン』(1858)の名翻譯であり、かつこの名作をはじめてわが國に移植したものととして、明治文學史上に不滅の光茫をはなつ記念塔なのであるが、なにぶんにも殆ど二百五十頁に近い長篇小説である關係上、これは當然べつに單行本として味讀されなければならぬ性質のものである。また『くされ縁』は、ツルゲーネフの最も初期の作品の一つ『ベトゥシヨフ』の翻譯であるが、これもまた百頁に近い分量から見ても、この集には割愛せざるを得なかつた。二葉亭にはなほそのほか、『わからずや』

及び『けふり』の二つのツルゲーネフ物があるが、前者は戯案劇の趣きが濃厚であり、後者は後期の長篇小説『煙』のうち原稿紙にして百四十四枚といふ未完譯であるので、ともにわざわざこの集に収める必要を認めなかつた。

のこる五篇をもつてしても、ツルゲーネフ移植の仕事における二葉亭の力量は、十分に彷彿できるはずである。またこの五篇が『ルーヂン』と並んで、それぞれツルゲーネフの初・中・後の三期を代表して恥ぢない短篇小説の傑作であることにも、些かの疑ひもないのである。

ロシア文學紹介の大先達としての二葉亭の仕事は、大ざつばに云つては三つの時期に分けることができるやうである。ここに収めた五篇の解説に入る前に、問題をツルゲーネフに限らず、ひろくロシア藝文の紹介者としての二葉亭の事蹟を、いちおう年表のやうな形で概観しておくのがよいであらう。

第一期と假に名づける時期は、明治十九年から同二十二年に至る期間で、つまり二葉亭が二十三歳で東京商業學校（東京外國語學校を前年に合併した）の露語科五年級を中途退學した時から、内閣官報局の職員になつて英字新聞や露字新聞の翻譯に従事した時までに當るわけである。この四年間の仕事のうちで、二十四歳にして出世作（浮雲）の第一篇を初めて二葉亭の名をもつて出版したことは特記すべきである。ロシア藝文の紹介ないし移植の方面の業績としては、次のやうなものが教へられる。

明治十九年——カトコフ『美術俗解』。ペーリンスキイ『美術の本義』（但しこのペーリンスキイといふ發音は誤りで、力點ガリの上にあることは今さら斷わるまでもあるまい。念のために註記して先人の苦心を偲ぶ

よすがとする。）

明治二十一年——バヴロフ『學術と美術との差別』。ツルゲーネフ『あひびき』。おなじく『めぐりあひ』（のちに『奇遇』と改題した。）

明治二十二年——ドブロリウボフ『文學の本色及び平民と文學との關係』。

ここに明治二十一年といふのは、西曆にすれば一八八八年であつて、すなはちカトコフの歿年に當つてゐるし、またツルゲーネフが死んでから五年にしかたつてゐない。さうした數字の上の檢證は、吾輩なしに二葉亭のロシア文學紹介の仕事のもつ先覺者的な役割を明かにするであらう。且つまた、左はペリンスキイやドブロリウボフから、ツルゲーネフ、バヴロフを経て、右派ジャーナリズムの大立物カトコフに至るまでを包容してゐる紹介の振幅のひろさも、ある意味では興味の少ないことではない。

そこで二葉亭のロシア藝文の紹介の仕事には、六年ほどの休止があつて、ついで假に第二期とも呼ぶべき時期が来る。それは彼の三十三歳から三十六歳にいたる壯年期の仕事である。

明治二十九年——この晩秋、翻譯集『片鱗』が春陽堂から出版された。

明治三十年——ゴーゴリ『肖像畫』。ツルゲーネフ『夢かたり』。おなじく『つき草』。

明治三十一年——ツルゲーネフ『猶太人』。失名氏『親こころ』。ツルゲーネフ『くされ縁』。

明治三十二年——失名氏『酒袋』。そしてこの年の秋、東京外國語學校の教授になる。

そこでまた殆ど四年にわたる休止があつて、最後の第三期ともいふべき七年間が来る。

明治三十六年——ツルゲーネフ『けふり』の未完譯。

明治三十七年——ボタアベンコー『四人共産黨』。トルストイ『つつを枕』。ガルシン『四日間』。あとの二篇がいづれも戦争物であるのは、この年の二月にはじまつた日露戦争の影響かと思はれる。その三月、二葉亭は大阪朝日の社員になつた。

明治三十八年——ツルゲーネフ『わからずや』。失名氏『露助の妻』（これは翻譯にもあらず、翻案にもあらず、さりとて創作にもあらぬ一種の和合物——と斷つてある。）ゴーリキイ『猶太人の浮世』。

明治三十九年——ゴーリキイ『ふさぎの蟲』。ガルシン『根無し草』。ゴーリキイ『灰色人』。ゴーリキイ『むかしの人』。

明治四十年——ゴーリキイ『二狂人』。ゴーリキイ『狂人の日記』。ゴーリキイ『乞食』。なほこの年には、『露國文學談片』、『露國の象徴派』、『ゴーリキイとアンドレーエフの近業』のやうな紹介文があり、年末には翻譯集『カルコ集』が春陽堂から上梓された。なほこの年の秋から年末にかけ、名作『平凡』が朝日新聞に連載されてゐる。

明治四十一年——ボリワノフ『志士の末期』。ネモフスキイ『愛』。そして單行本としては『血笑記』、『うき草』の二書が出版される。そのほか、モスクワ藝術座の座主ネミロヴィチ・ダンチェンコの渡日を迎へて、『ダンチェンコ翁と語る』の一文があり、その能樂見物を助けるため『夜討會我』をみづから翻譯したりもした。おなじく獨歩の『牛肉と馬鈴薯』の一部を翻譯したのもこの年のことであるし、『露西亞文壇の傾向』といふ紹介文の作もある。この年の六月、朝日の特派員としてロシアへ出發した。

明治四十二年——『露都雜記』を朝日新聞に寄せた。そして五月十日、ベンガル灣を東進する船上で二葉亭

は死んだのである。西曆一八九九年、年齢は四十六歳であつた。

右のやうに二葉亭のロシア文學移植の仕事を概観してみると、二つの事實に氣がつく。その一つは手がけた作品の数から言つて、ツルゲーネフが斷然多く、九篇をかぞへるのに對し、ゴーリキイは五篇、ゴーリキイは三篇、ガルシンが二篇といふ順になつてゐる。それからもう一つ目だつことは、ツルゲーネフの譯述が第一期と第二期に集中されてゐること、第三期にはわづか『けふり』の未完稿が見いだされるにすぎない。入れ替つて第三期の努力が向けられてゐるのは、ゴーリキイを除けばあとはゴーリキイ、ガルシン、ボタアベンコ、アンドレーエフなどの近代作家ばかりである。そこにはどうしても、日露戦争を轉機とするあわただしい社會情勢の變化に應じた、二葉亭の文學觀そのものの急角度な轉回が認められなければならない。

そこで二葉亭のツルゲーネフ物は、心境的には比較的靜穩な彼の青壯年期を代表するものと考へてよい根據が生じる。いはばそこには二葉亭の若々しい情熱が貫ぬき流れてゐるのであつて、その自由な發揮をゆるす素材として、ツルゲーネフの氣品の高い詩的リアリズムともいふべき作柄は、まさに打つてつけたと言はれるであらう。

事實ツルゲーネフは、二葉亭には最も親しみ深いロシア作家であつた。文體の上からも、少なくとも初期・中期の彼にはびつたり肌の合つた作家で、その翻譯はおそらく二葉亭として得意中の得意の境上だつたに相違ない。明治三十九年、すでにツルゲーネフから筆を絶つた後の二葉亭は、『余が翻譯の標準』といふ一文を書いてゐるが、その中で最も多くツルゲーネフについて語つてゐるのも、決して偶然ではないのである。その一節を

次に引いてみよう。

「今、實例をツルゲーネフに取つてこれを云へば、彼の詩想は秋や冬の相ではない、春の相である。春も初春でもなければ中春でもない、晩春の相である。丁度櫻花が爛漫と咲き亂れて、稍々散り初めようといふ所だ。遙く霞んだ中空に、美しくおぼろおぼろとした春の月が照つてゐる晩を、兩側に櫻の植ゑられた細い路を辿るやうな趣がある。約言すれば、艶麗の中にどつか寂しい所のあるのが、ツルゲーネフの詩想である。そして、其の當然の結果として、彼の小説には全體に其の氣が行き渡つてゐるのだから、これを翻譯するには其の心持を失はないやうに、常に其の人になつて書いて行かぬと、往々にして文調にそぐはなくなる。此の際に在つては、徒らにコンマやピリオド、又は其の他の形にばかり拘泥してゐてはいけない。先づ根本たる詩想をよく呑み込んで、然る後、詩形を崩さずに翻譯するやうにせなければならぬ。」

二葉亭のツルゲーネフ觀が、翻譯の心構へを語りながらも、しらずしらずのうちに美しく流露してゐることに讀者は氣づかれるであらう。二葉亭によれば、翻譯の要義はまづ個々の作家について「その詩想を會得」することが必要であるのみならず、「嚴しく云へば、行住座臥、心身を原作者の儘にし」さへして、忠實に彼の詩想を移すことにあつたのである。そしてツルゲーネフの場合、二葉亭が「その詩想に同化」する覺悟に吝さかでなかつたことは、右に引いた一節のすぐ後につづく段で、彼自身はつきり述べてゐるところである。

ところで、翻譯の要訣は必ずしも右のやうな詩想への同化に盡きるものではなかつた。もう一つ「詩形を崩さぬ」こと、つまりいはゆる「文調」の上の忠實さがある。この點についても、二葉亭はとりわけツルゲーネフの譯出にあたつて、並々ならぬ苦心を拂つたのであつた。そのやうな「形」の上での苦勞を述べて、二葉亭

は同じ文章のなかで、「原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、譯文にも亦ピリオドが一つコンマが三つといふ風にして、原文の調子を移さうとした。殊に翻譯を爲始めた頃は、語數も原文と同じくし、形をも崩すことなく、偏へに原文の音調を移すのを目的として……」などと語つてゐる。

かうして見ると、二葉亭の殊にツルゲーネフ翻譯なるものが、われわれ後人にとつて徒やおろそかに讀みすぐすことができないやうな、慘憺たる拮据經營の結晶であつたことが會得されるであらう。もつともさうした苦勞の成果については、二葉亭自身なかば謙遜をまじへながら、かなり懷疑的であつたことは事實であるが、それとこれとは別問題である。一口に二葉亭の名譯といふが、そしてロシヤ語を解しない人のなかには、あれは原作に忠實なものではなくて寧ろ日本語の調子にいい氣持で乗つかつてゐる。自由奔放な翻譯のやうに錯覺してゐる人もあるやうだが、事實はまったく正反對で、ことばの眞の意味における嚴密な翻譯を求めて泣血の苦心をしたことにかけて、二葉亭に及ぶ人は明治以來今日まで絶えて出現してはゐないと言つていいのである。

もちろん今日の眼で見ればこそ、二葉亭の譯文はいかにも自在闊達で、まるで原文などはそつちのけにして、ひたすら譯述の興に酔つてゐるやうに見える。だが當時、つまり明治二三十年代ごろの人々の、いはゆる美文調に馴れた審美眼からして見れば、二葉亭の譯文は決して讀みよくも流麗でもなかつたはずだ。それを見落してはならない。現に二葉亭自身、自分の譯文の出來榮えについて、「いや實に讀みづらい、倍個聲牙だ」と述べ、また「ぎくしやくして如何にとも出來榮えが悪い。従つて世間の評判も悪い」と、歎聲を發してゐるのである。なかには褒めてくれる人もある。だがその褒め言葉も勘どころを外れてゐるのだから、別に嬉

しくもなければ、悪口を言はれても同様にして痛くも痒くもない。要するに自分は自分の信念にしたがつて苦勞をして來たのだ。その信念とは、彼に言はせると「文學に對する強い尊敬の念」なのであり、「例へばツルゲーネフが其の作をする時の心持は、非常に神聖なものであるから、これを翻譯するにも同様に神聖でなければならぬ。就ては、一字一句と雖も、大切にせなければならぬやうに信じた」のであつた。

ところで、さうした二葉亭の當時はもとより今日にも殆ど類例がないと言つていいほどの良心的な翻譯の仕事が、例へば森鷗外のやうな人の眼にはどんなふう映つたであらうか。

鷗外が最初の譯詩の試みを一束して『於母影』の名のもとに『國民之友』誌上に發表したのは、明治二十二年八月のことである。二葉亭の『あひびき』の譯文が同じ『國民之友』に載つたのは、その前年の夏七月のことであり、また『めぐりあひ』が發表されたのも、おなじく前年十月から明治二十二年一月へかけての『都の花』誌上であつた。つづいて明治二十三年に、鷗外は『ふた夜』、『惡因縁』、『うもれ木』などドイツの短篇を翻譯して、その最初の文集『水沫集』が上梓されたのは明治二十五年のことである。のみならず鷗外には、ドイツ語からの重譯ではあるがトルストイの『瑞西館』や、ツルゲーネフの『まぼろし』の部分譯である『該撒』が現にこの『水沫集』にも收めてゐるし、ついで明治三十年に出版された『かげ草』には、レールモントフの邦譯として古典的價值をもつ『ゆけうり』及び『浴泉記』(もつとも後者は小金井きみ子女史の筆であるが)が、收めてあるほどである。さらに『諸國物語』には、トルストイやドストイェフスキイをはじめ、ドイモフ、コロレンコ、ゴリキイ、チリコフ、アルツイバーシエフ、クズミンなどのロシア物をも收めてあることは周

知のごとくだが、これは既に二葉亭歿後の大正年間に入つてからの上梓であるから一應は度外に置くとしても、ロシア文學の紹介について二葉亭と鷗外の二人が、年代的にもかなり密接な關係にあつたことは明らかな事實である。

その鷗外に『長谷川辰之助』といふ一文がある。明治四十二年、二葉亭を追悼するため逍遙・魯庵の共編で出した文集に寄せたもので、それによると鷗外は二葉亭にただ一度、その死の前年に會つてゐるだけである。

とはいへまるで交渉がなかつたのではなくて、ゴリキイを譯すのにドイツ譯を參考にしたいといつて、二葉亭が借りて人をよこしたことがあつたり、あるロシア人が横濱で雜誌を出すについて、『舞姫』を露譯して載せたいがいだらうかと、その諸否を手紙で問合せて來たりしたことがあるさうである。

それはとにかく、肝腎の鷗外の二葉亭觀であるが、鷗外は『浮雲』には「私も驚かされた」と述べて、心理小説の先驅としてのその意義に率直に脱帽してゐるのに反し、翻譯のことになると、次のやうな極めて素氣ない數行を記してゐるにすぎない。「翻譯がえらいといふことだ。私は別段にえらいとも思はない。あれは當前だと思ふ。翻譯といふものはあんな風でなくてはならないのだ。……あれがえらいと云はれたつて、亡くなられた人は決して喜びはせられまいと思ふ。」

この鷗外の非情な態度はさすがである。まさしく翻譯といふ仕事のあり方を底の底まで見きはめた人の、同情にあふれる言葉である。この知音の言に、地下の二葉亭はさだめし莞爾として微笑したに違ひないと思ふ。前にも記したやうに、二葉亭は決してその翻譯の出來ばえを、自ら足れりとして許してゐたわけではなかつた。それを鷗外は、「翻譯といふものはあんな風でなくてはならない」と評してゐるのだ。およそ褒め言葉として、

この冷やかな数語にまさるものが、この世の中にありようはすはない。いはば二葉亭と蘭外とは、翻譯の上で全く正反對の側から出發したやうなものである。それだけに、蘭外としては二葉亭の苦心のありどころが、またその苦心の正しさが、分りすぎるぐらゐ分つてゐたに相違ないのである。

二葉亭はさきに引いた『余が翻譯の標準』といふ文章を結んで、「併しそれは以前自分が眞面目な頭で、翻譯に従事した頃のことである」と述べてゐる。この「以前」といふのが、明治二十一年の『あひびき』や『めぐりあひ』に始まつて、同じく三十年代の初めにかけて『片戀』『夢かたり』『うき草』などのツルゲーネフ物が續々として譯出された、彼の初期から中期へかけての時代を指すものであることは改めて問ふまでもない。なかでもその代表的な刻身鑲骨の仕事が、その最も初期に成つた『あひびき』と『めぐりあひ』であつたことも、今さら言ふまでもないことである。

『あひびき』は上述のごとく明治二十一年『國民之友』の七・八兩月のそれぞれ第一金曜日の號に載つたものであり、『めぐりあひ』は同じ年『都の花』の十月號から載りはじめて、翌年一月號で完結したものである。のち明治二十九年十一月に上梓された翻譯集『片戀』に收められるに當つて、兩篇ともに全く面目を一新するほどの改訂の筆を加へられ、ことに後者は『奇遇』と題をまで改められたのであつたが、さうした著るしい加筆の跡は、ほかの二葉亭の譯稿についても絶えて見られぬところである。この集に採つたのは、翻譯集『片戀』に收められたところの改訂された形であることは言ふまでもない。今それを試みに『奇遇』について、『都の花』に掲げられた當時の譯文と比較してみることは、二葉亭の翻譯上の苦心を端的に把握するうへで、決して興味の

浅いことではあるまい。

まづその書出しの部分であるが、『都の花』第一巻第一號に初めて載つたときは、次のやうな譯者の前置きがついてゐた。「都の花の咲きぞめに青葉も花のにぎやかした、何ぞ一つ書いて見ろといふ情ある方々の仰せにすがつてちよつぱり翻譯の稽古を致しました。此『めぐりあひ』は原名を『トリイ、フスアレーチイ』と云つて極めて艶の有る文章なかなか禿びた筆では一々譯し切れません。そこで些とくだくだしいが刺註を添へましたからお看合せの上おなほしながら御覽の程を願ひます。」

かうした戲作者めいた物の言ひぶりも、何しろ日本の舊憲法が發布される直前といふ當時の世相を思ひ合せれば、さほど無理もなしに會得が行くことと思ふが、しかも肝腎の譯文そのものになると、二葉亭の筆は高踏と俗調とのあひだ、精密と粗放とのあひだに、なんとかして一つの調和境を見いださうとして、殆ど七轉八倒の苦しみをしてゐるのである。試みにそれを、小説の冒頭數行について窺つてみることにする。

『都の花』所載『めぐりあひ』

何處へと云つて夏の中は「グリーンノエ」村へほどよく遊獵に往つた所はなかつた、自分の莊園から二十露里計の所に有る（「グリーンノエ」村へほど）。此村の近傍には野鳥撃ちには郡中第一とも謂ふ可き場所が澤山有つた。最寄の灌木または野田などを残らず獵り盡して、自分はいつも日没

『片戀』所收『奇遇』

自分の持村から五里ばかりの處にグリーンノエといふ村が有つたが、夏の中は屢々此村へ遊獵に往つた。其村の界限には野禽撃ちでは恐らく郡中第一であらうといふ場所が幾らもある。最寄の灌木の間や野面などを獵盡して、いつも日暮に此邊では珍らしいものにしてある、村近くの沼へ寄つて、

ごろになると此邊には滅多に無いといふ隣の沼へ
立寄つて、其處からはもう旅宿へ歸る事としてゐ
た、此旅宿といふのは……

其所から直ぐに旅宿に歸ることにしてゐたが、旅
宿は……

初めの形にくらべて、改訂譯の方が遙かに簡潔でもあり流暢でもあるといふ例證などのために、この比較を
持ちだしたのは決してない。いま虚心にこの二つの譯文を並べ眺めてみると、舊譯の方が一見はるかに一
くしやくしてゐることは明らかだが、更にそれをツルゲーネフの原文に比べてみるに及んで、われわれはこ
の舊譯が、いかにして原文の文調や語脈の末々をまで移植しようかといふ、ただに先人未踏であるのみならず
後人すら恐らく夢想だもしがたいやうな慘憺たる苦心そのまゝの具現であることを知つて、凄然たる感慨を禁
じ得ないのである。その一端を窺はうがための比較なのであつた。

さらにこの比較をも少し続けるとすれば、次のやうな一そう著るしい差違に行きあたるのである。

『めぐりあひ』

待ちわびるでもなく、又昔しの仕合を憶ひ出す
でもなく、何とも言へぬ感情に胸を悩まされて、
自分は背で身動をもせず、此月の光と露とを浴び
た寂然な（直譯は）園の前に立在んで、どういふ積
りか只管やさしい（soft）うすぐらが（half-shade）
の中にはの赤く見える夫の二つの窓を視詰めてゐ

『奇遇』

幸福を待つつでもなく、憶出したものでもな
く、何とも口には言はれぬ心地に萎されて、身動
きだもせずに、この月に照され、露に濡れて、
寂寞としてゐる園の前に佇立むだまを黯淡い中に
うす赤く見える二つの窓を、如何いふ積りか、傍
眼も觸らず諦視めてゐると、ふと家の内で鳴物の

るとふと家内に record（調子を諧はせる音）が響
いた……焦心つたやうに鳴り渡つて空氣は反響を
響きかへした……自分は我知らずぶるぶるとし
た。

Accord に續いて婦人の聲が響いた……自分は
一心に聞入つて……びつくりした（直譯は驚
云はれやうかといふのだが是れでは原文の）……
語氣が出ませんから餘儀なく意譯しました……
……二年前伊太利で「ソレント」でこの歌を聞い
た、この聲を……さう……

調子を諧はせる音がした——音がして、浪のやうに
うねりを打つて響き渡ると……空氣は焦心で響き
反へす……自分は我知らず慄然とした。

鳴物の音に續いて女の聲で歌を唱ひ出した。一
心に聴入ると……や、驚くまい事か……二年前に
伊太利のソレントで此歌も此聲も聞いた事があ
る……それ……

もちろんこの段でも、舊譯は新譯にくらべて遙かに逐字譯的、ないしは逐調譯的である。「伊太利でソレ
ントで」と、「で」を反復してゐるのは勿論ロシア原文の措辭法をそのままに追つたものであるし、一心に聴
入るあたりの表現も、舊譯の方がかなり稚拙ではあるにしても、やはり原文の語やシラブルの配置に近いの
である。

また二葉亭は舊譯の前書きに、「些とくだくだしいが刺註を添へ」た旨を斷わつてゐるが、さうした例は右
の引用個所のなかにも二三見受けられる。一々英譯を参照しなどして今から見ると寧ろ滑稽なほどの神經質ぶ
りを發揮するばかりか、いささかと雖も意譯に陥らんことをひたすら畏れ憚かつてゐる有様は、おそらく讀譯
ずれのした今の人々の微笑どころか哄笑をすら買はないものであるまいと惧れられる次第である。のみたら

ずその刺註なるものが、「些と」くだくだしいどころか、時として次のやうな頗る長文にわたることさへあつたのである。いま引いた段の少し前に出てくるのだが、新譯ではあつさり「四圍の物が總て恍惚として」できれいに言ひ切つてあるところを、舊譯では「何も角も四邊の物はだらりとして鎔けてゐた」とし、尙それに加へて次のやうな二百字近い刺註が添へられてゐたのであつた。——「これは原語の「ネージロシ」といふ字の譯ですがまだ言ひ足りません字書には「ツ、バムバア、ワン、セルフ」と英譯して有りますが是れでもまだ言ひ足りないやうです是れは日向ぼこりなどしながらねそべつてゐると氣がゆつたりとして節々がゆるみ物を縦にするもいやになつて誠によい心持になるものだがさういふ心持になつてゐる人の有様をいふので即ちたりとしてゐるならなくさみ楽しんでゐる氣味も何處かに有るものです」云々。

もちろんいま讀者の前に提供される二葉亭譯ツルゲーネフ五篇は、以上のやうな七面倒くさい解説とか新舊兩譯の對比とかいふ手續抜きでも、りつぱに讀み樂しめるはずである。それは改めて言ふまでもないことだ。いかにも二葉亭は、われわれが今日使つてゐる現代日本語を、はじめて文學の世界で驅使して見せた人として、その功績をひろく認められ、且つ讃仰されてゐる人にちがひない。そして彼の言葉の方面における革新し役割の證左として、『浮雲』なり『平凡』なりを人が持てはやすのも、たしかに道理にはづれたことでないに違ひない。だが人々は、果して具體的に、あるひは實證的に、われわれが二葉亭四迷に負つてゐる恩惠の實體を、はつきり見きはめたことがあるだらうか？ わたしは深くそれを疑はざるを得ないのだ。

もしこの疑ひが幾分なりとも正しさを含んでゐるとすれば、以上わたしが彼の翻譯方面における並々ならぬ

苦心の跡や、その神經質なまでの細心さなどについて、いささかくだくだしく語つたかと云つて、さほどの外れた無用のわざではなかつたであらう。實際われわれは現にかうして樂々と操つてゐる現代日本語について、驚くべく多くのものを二葉亭に負つてゐるのである。その事實を一ばん見易く物語つてゐるものが、ほかならぬ彼のロシア文學移植の仕事であり、とりわけそのツルゲーネフ物の譯業であるとわたしは信じてゐる。

舊譯と新譯との間の隔たり、これを言ひかへれば明治二十一年の口語概念と明治二十九年のそれとの間の驚くべき進歩の跡については、『あひびき』の譯文についても幾多の貴重な例證を擧げることができるのであるが、あまり紙数を費やすことは時節がらどうかと思はれるので、餘はすべてこの問題に興味を持たれる讀者諸賢が直接『國民の友』なり『都の花』なりの舊號について、みづから檢證されることに期待をつないで、この上の贅言はつつしむことにしたいが、ただ一つだけ、二葉亭のツルゲーネフ翻譯の仕事が明治二十一年頃の一一般讀者にどのやうな眼で迎へられたかを物語る一挿話を、老婆心までにここに掲げておきたい。

『あひびき』の初めての譯が掲げられたのは、前にも記したとおり明治二十一年七月・八月の『國民の友』誌（第二十五號の附録と第二十七號）の「藻鹽草」といふ欄であつたが、同じ年の第三十號（九月の第三金曜日號）の投書欄には、『あひびき』を讀んで」と題する思案外史（すなはち我樂多文庫の石橋思案）の批評が出てゐる。それは恐らく硯友社一派からする新文學への反擊の一つの現はれとみなしてよいものであらうが、まづその書出しからして「我國で言文一致派の小説宗を開山せられた春廻屋祖師の御弟子の中で日の出の譽れ高き二葉亭四迷先生がお譯しになつた……」などと毒を含んだ言ひ方がしてゐるところからも明らかなやうに、批評といふよりは寧ろ酷評であり毒舌であるに近い。その中には、「一體に言文一致の文章はややもすると形

容がヒツツコイ様です、所謂嬌嬌のやおむろ先生の「チョツ氣障ッポイ」形容が澤山な様です「などといふ言葉があつて、敵はむしろ『あひびき』にはなく、却つて言文一致體そのものにあるかのやうに推察されるのだが、それにしても思案が、「小雨が忍びやかに、怪し氣に、私語するやうにバラバラと降つて通つた」とあつた二葉亭の舊譯文を、「小雨の降り様にはチト大葉ではありませんか」と評し、「低い鼻に皺を寄せて」とあつたり、「平氣で伸をしながら、また欠伸をした」とあつたのを、「一寸讀んだ處でも随分妙に考へられました」と評し去つてゐるのである。今日の眼で見ればこそ、これは單なる姑の嫁いびりに過ぎない。一口にリアリズムなどといふが、その攝取と移植にあたつては、例へばこんな笑ひ話に類する抵抗や障害があつたのである。記憶されている事がらである。

最後に、言ひ残した原作の作年代などについて、二三簡単に言ひ添へておきたい。ここに收めた五篇の原作の題名や作年代は次の通りである。

『猶太人』(Zhid)。一八四六年の作。ツルゲーネフがまだ無名であつたごく初期の作風を窺はしめるもの。ツルゲーネフはこれを書いた頃まだ二十八歳の青年であつた。二葉亭の譯文は明治三十一年(一八九八年)『國民の友』の一月號に載つた。

『あひびき』(Svidanie)。有名な『獵人日記』(一八五二年出版)に收められてゐる佳品。わが國では二葉亭の名譯によつて殊のほか人口に膾炙してゐるが、それはなくとも當然集中の壓巻たるべきものと思はれる。ツルゲーネフがこれを書いたのは、おそらく一八四七年から同五〇年ごろの間、パリのヴィアルド夫人の家に

おいてではなかつたかと推察される。

『奇遇』(Tri vstrechi. すなはち『三つの邂逅』)。一八五一年の作。ただしこの作の素材を、これより先き四〇年代の末イタリヤに遊んだ頃の思出に得てゐることは明らかで、その旅行の路次、彼はスタンダールに會つてゐるはずである。

『片戀』(Asia. すなはち『アシア』といふ女主人公の名)。一八五七年、ツルゲーネフ三十九歳の筆に成る中年期の秀作である。『うき草』(ルーヂン)はその前年の作であつた。なほ二葉亭はこの『片戀』を明治二十九年十一月に刊行された同名の翻譯集に初めて載せたのである。

『夢かたり』(Sn. すなはち『夢』)。ツルゲーネフの晩年近い一八七六年の作。つまり最後の長篇小説『處女地』の成つたのと同じ年に書かれたメラソリックな物語である。二葉亭はこれを譯して明治三十年四月、『文藝俱樂部』の臨時増刊『小説八家選』に寄せた。

19374

昭和24年3月15日 印刷

昭和24年3月20日 發行

あ ひ び き

支	發	印	印	發	編	定價 貳百圓
社	行	刷	刷	行	者	
	所	所	者	者	者	
日本出版協會會員番號A二一九〇六七 電話下局六〇〇八・六〇〇九番 振替京都二五六二二番	株式會社 世界文學社	京都府下京區鞍馬町通四條下ル 河北印刷工業所	京都市左京區淨土寺南田町一〇八 河北印刷工業所	柴野方彦	神西清	
東京本町一ノ四區						

落丁、亂丁は何時でもお取換へします。

配給元 日本出版配給株式會社

F83
Tu 5
6

終